

ブギス族の市場と村落

—南スラウェシ，ソッペン県の一農村から—

伊 藤 眞

(帯広畜産大学日本語日本事情研究室)

Markets and Villages in the Buginese, South Sulawesi:
a preliminary report on their village life

Makoto ITO

1. はじめに

本稿はブギス人の村落生活に関する社会人類学的調査報告の一部をなし、特にインドネシア共和国南スラウェシ州のソッペン県における定期市とそれらを巡回する商人について述べるものである。調査は、ソッペン県及びそれに隣接するワジョ、ボネ県において実施され、とりわけソッペン県リリアジャ郡ジェンナエ村について集中的な調査を行った。ジェンナエ村は県庁のあるワタン・ソッペンの東南約20kmの距離にあり、同村へは乗合自動車を乗り継いでおよそ45分を要する。

筆者がテーマとしてソッペン県における定期市と商人を選んだ理由は主として次のようである。一つは、ブギス人が従来、海洋民として、あるいは商人として紹介されてきたにもかかわらず、彼らのホームランドの村落生活における社会・経済的側面については、これまであまり報告されていないためである。また、ソッペン県を選んだのは、かつて「交易王国」(L. Andaya 1980)を築いたとされるワジョに関しては、ペルラス(C. Pelras)を中心にいくつかの研究があるものの、前者については皆無に近かったためである。もう一つ

の理由は、他の諸県に比べ総面積の狭いソッペン県では、県内の定期市の状況を把握し易いと考えられたからである。更に、この県は独立後、従来の農業県というイメージから、タバコ製造や生糸生産など新しい産業の振興でも知られるようになっており、その村落を見ることは現在の南スラウェシ、ブギス人の状況の一断面を知る上でも適切であると考えられたからである。

筆者がブギス人について、特に、商人ないしは商人性という側面から見ようとするのは、そこに彼らの際立った特徴を考えるからである。ブギス人は従来から雄飛の精神に富むといわれ、インドネシア島嶼部各地におけるコロニー建設にみられるように、活発な出稼ぎ (merantau)¹⁾ や移住活動を展開してきた。そうした移住先では、彼らの生業選択における自発性と柔軟性が指摘され、それがしばしば彼らの移住開拓村における成功をもたらしたともいわれている。こうした生業選択の柔軟性とその遂行能力を、筆者はとりあえず「商人性」という語で捉えようとするものだが、そうした性向がとりわけ「商業精神」(jiwa dagang) をもつことで有名なワジョの人々以外においても見出されるかどうかを先ず、ソッペン県を例として検証したいのである。

尚、本調査は、筆者が所属したハサヌッディン大学文学部 (南スラウェシ州ウジュン・パンダン市) の協力をえて、1984年8月—翌年2月、5月—8月まで実施された。その間、ジェンナエ村の人々やハサヌッディン大学のスタッフには大変お世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。また、特に同大学文学部講師バフティアル・アッサン氏 (Drs. Bahtiar Arsan) には、とりわけブギス語の指導、フィールドの紹介など諸面において大変お世話になったが、氏は本年 (1986年) 9月急逝された。この場を借りて、ここに氏の御冥福をお祈りしたい。

〔ソッペン県〕 ソッペン県は、南スラウェシ州のほぼ中央部、ロンポバタン火山 (標高2,876m) に代表される南部山地と標高3,000mを越す山々が連なる北部山岳地帯に挟まれた丘陵・台地部に位置し、東南をボネ県、西をブルー県、北をシドラップ・ワジョの両県に囲まれた内陸県である。県の東側には、

南部山地に源を発しテンペ湖に注ぐワラナエ川が縦貫しており、同河川やその支流がもたらす比較的豊かな水資源によって従来より米作が盛んであり、また最近では、タバコ産業や生糸生産も盛んである。主な調査地であったリリアジャ郡は、県内の5郡中もっとも米の生産高が多いことで知られる。同郡は、ジェンナエ村の他、ガンラ、ベロ、ガルン、パットジョ、ジャンプ、チッタの7村より成り、これらがL字状に並ぶ。北端に位置するガンラとベロは、県内でも有数の水田地帯である。その南には郡庁の置かれるガルンがあり、底辺部は東西の順にチッタ、ジャンプ、ジェンナエ、パットジョの各村が並んでいる。同郡の東側をワラナエ川が流れるため、ボネ県に続く丘陵地にあるチッタ村へはピンチャラとよばれる大型の筏で同川を横断しなければならないが、この村を除く他の村々は平坦地か緩やかな傾斜地にあり、比較的交通の便もよい。また、パットジョとチッタは1961年の郡制改革（それ以前郡を示す用語としてブギス語の *wanua* が用いられたが以後、インドネシア語の *kecamatan* になる）まで、それぞれ単独の郡であった。

ソッペン県の前身は「天孫降臨」(*To-manurung*) 神話に起源をもち、14世紀初頭に成立したといわれるソッペン王国である。一般にロンタラと総称される古文書によれば、当初それぞれ独立した60の部落よりなつたこの地方は二人のト・マヌルン(天孫)の出現以降、各々を王(*datu*)とする「東ソッペン」「西ソッペン」の双子王国となり、更に第10代西ソッペン王マタエッソ(*Mataesso*)の代には東ソッペンが西ソッペンに属するかたちで一つに統合されたという。また、王国の領土の輪郭が定着するのもその王の時代で、ボネ、ワジョとの三国間で結ばれた兄弟同盟、通称「テルン・ポッチョエ」(*Tellumpoccoe*, 1582年)においてワジョよりマリオリアワ、ボネよりチッタを得て以後それが保たれた。王国としては、その三国同盟の中で「末弟」として位置づけられたように、ボネ・ワジョなどと比べ弱小であったが、1609年のイスラム国教化、1666—69年のマカッサル戦争などを経て、以後王位はオランダ統治期も存続し、ソッペン県の成立する1957年まで36代を数えた。

ここで、行政・村落制度の変遷について簡単に触れておこう。今日のソッペ

ン島の成立は、インドネシア共和国独立後の1957年のことである。それ以前、今世紀初頭よりソッペン王国は南及び南東スラウェシの他の諸王国と同様オランダの統治下に入り、8つの県に併統合されたが、先述したように従来の王制はオランダ統治期、日本軍政期そしてインドネシア独立後までそのまま維持された。オランダ統治はボネ戦争（1905）によるボネ王国の敗北とそれに続く諸王国の降伏に始まる。1908年、ボネ・ワジョ・ソッペンの三王国は一県にまとめられボネ県（afdeeling）となり、県都はボネ北部のポンパヌアに置かれた。また、ワジョ、ソッペンはそれぞれ分県（onder-afdeeling）となり、各分県は更に、郡（distrikt, *wanua*）一分郡（onder-distrikt, *wanua-bawahan*）一部落（*kampung*）に下位区分された。ソッペン分県の場合、現在のララバタ、マリオリアワ、マリオリワウォ、リリリラウ、リリリアジャの5郡にチッタ、パットジョを加えた計7郡であり、各郡の長には、それぞれの地域の世襲的土侯（*arung*）がなった。郡の下部単位となるのは、ほぼ今日の行政村（*desa*）に相当する分郡である。これは「スレワタン」（*sulewatang*）を長とし一つの郡を2～4に区分するものであり、例えばリリリアジャ郡の場合、ガルン、ガンラ、ロムプレの3分郡、ララバタ郡の場合も西ララバタ、中ララバタ、東ララバタ、の3分郡であった。分郡の下に位置する部落は、それぞれ部落長（*matoa kampung*）を頭とする自然村的集落である。これら分県、郡、分郡、部落という単位は途中、一部に名称上の変更はあったもののインドネシア独立以後、王制が廃止されるまで存続した。各「王立」県が地方行政組織の一部となるのは1957年のことで、それまでソッペン国の王位にあったアンディ・ワナは第一代県知事（*kepala daerah tingkat II, bupati*）となった。しかし、この時期と前後してカハール・ムザカルの反乱（1952～1965）が勃発、ダルール・イスラム軍とインドネシア国軍（DI/TH）の対立期に入る。南スラウェシ全土がこれに巻き込まれ、州都・県都主要部を除く地域はダルール・イスラム軍に掌握された。この時期は、「群団の時代」（*zaman gerombolan*）と別称されるようにゲリラ側内部の分裂のみならず、他にも様々な武装集団が生まれ、暴行殺傷が繰り返され、家屋の焼失とそれによる疎開などが相次いだ。ソッペン県の

場合、この混乱は1960年頃まで続いた。これにより、村落レベルの整備は立ち遅れ、それがほぼ今日の形態に近いものになったのは新たな村制改革 (desa gaya baru) が施行される1965年以降である。

2. ジェンナエ村

〔村の概要〕 ジェンナエ村のほぼ中央をウジュンパンダンからチャンバを越えワジョ県の県都センカンへ至る州道が南北に走り、これに隣村のパットジョからジャンプ、更にワラナエ川を越えチッタ、ボネ県へと至る県道が交差している。道路沿いには、殆ど途切れることなく、ブギス・マカッサル族の地域に特徴的な切妻型屋根の高床式家屋が並んでいる。これは、従来のアッパサレン、アウォ、チャチャレップンの3部落に、レワレワ (Lewa-Lewa)、アカリバトゥエ (Akalibatue) それにチョップエ (Cobbue) などの部落が独立後新しくひらかれたこと、また、DI/II時代、インドネシア国軍により治安上の理由から、元来は道路から離れてあった家屋を道路沿いに移動させられたためである。州道と県道が交差する地点には道路を挟んでイスラム寺院と村役場とが相對している。村役場の東側には、村の儀式などが催される広場があり、南側にはラジョア市場がある。こうしたイスラム寺院、市場、広場が現在のブギス村の基本的景観をなす要素である。

元来の部落の位置を見ると、川や泉などの水源の近くに形成されたようである。アッパサレンにはダンラエ (Danrae) とジェンナエ (Jennnae)、アウォにはチモッコ (Cimokko)、チャチャレップンにはジャンプエ (Jampue)、チャンパ・チェンニ (Campa cenni)、ダオ (Dao) の泉がそれぞれある。また、州道の西側をラジョア川が湾曲して流れているが、この川が県道を横断し、州道と最も接する部分にもラジョア、ジョムピエ (Jompie) の二つの湧き水場所がある。こうした水源は、日頃水浴びや洗濯に欠かせない場所で、とりわけ、女たちで賑わう。例えば、チャチャレップンの場合、2つに分かれるが、現在「下」チャチャレップンと呼ばれる州道西側部分が元の部落であり、そこには部落の象徴的中心をなす「地のへそ (中心)」 (*possi tana*) があった。これに

対し、市場などのある州道の東側の「上」チャチャレパンは、日本軍政期以降開かれたものである。その地域への転住が著しく遅れたのは、恐らく、水源のなかったことが大きな理由であろう²⁾。

この村は1981年、郡庁のあるガルン村と共に新たに村制改革が実施され、行政村としての名称もデサからクルラハン (kelurahan) に変わった。それに伴い、村の構成はそれまでの3部落からアッパサレン、チャチャレパンの二つの地区 (lingkungan) に再編成された³⁾。村の総面積は17km²と他村と比べ狭いが、人口は1983年現在5,757人 (1,166世帯、男2,732人、女3,032人)、県内では比較的人口密度の高い小村である。表1に郡内各村の面積、人口を示す⁴⁾。独立前の統計は公表されていないが、筆者が入手したオランダ統治期 (1931年6月) における部落別人口統計⁵⁾ と比べると、現在のジェンナエ村を構成するアッパサレン、アウオ、チャチャレパンの3部落の人口はそれぞれ365人、422人、350人、合計1,137人で、現在はその約5倍に当たる。ちなみに、当時のソッペン分県全体の人口は45,754人、これに対し現在はその約5.16倍の236,069人 (1981年県統計局調査) である。

職業の分布は表2の通りである。郡内の各村役場による統計を元に作成したが、職業区分が村により若干異なるため、大まかな分布しか把握できない。タバコ産業で有名なチャベンゲ周辺のような特定地域の専門化は見られない。しかし、これによりジェンナエ村が他村に比べ農業人口の割合が低く、逆に事業家 (pengusaha)、商人 (pedagang)、職人 (tukang)、運転手など市場に関わり

表1 ソッペン県リリアジャ郡村別人口・面積・人口密度

村落名	人口 (男/女)		計	面積 (km ²)	人口密度
Jennaë	2,732	3,032	5,764	17.00	337
Galung	3,373	3,913	7,286	24.00	304
Pattojo	3,981	4,561	8,542	34.00	250
Citta	4,084	4,668	8,752	40.00	218
Ganra	3,293	3,034	6,327	31.00	202
Jampu	2,924	3,137	6,061	21.00	283
Belo	2,237	2,560	4,797	14.00	339

表 2 生業別従事者数 (各村役場統計1983年により作成)

村落名	農 業	公務員	商 業	職 人	事業家	日雇い	運転手	合 計
Jennae	1,375	112	215	82	—	41	73	1,898
Galung	1,573	250	196	24	78	76	28	2,225
Pattojo	3,687	147	42	52	136	—	22	4,086
Citta	2,184	126	47	264	75	—	5	2,701
Ganra	1,653	98	57	37	45	—	—	1,890
Belo	1,154	65	31	49	81	—	35	1,415
Jampu	1,044	145	60	22	—	—	27	1,298

のある生業に就く者の割合が高いことが認められる。統計の職業区分について説明すると、農林業は、田畑の自作・小作者、また、林産物 (hasil hutan) といわれる椰子砂糖製造などが含まれる。公務員・教員は役所、保健所、学校など公的機関に勤務する者をいう。事業家といわれるのは、人を雇って建築斡旋、タバコ製造、ミニバス操業などを行う個人経営者であり、商人とは穀物の集出荷を行う穀物商人 (pedagang hasil bumi) や商店 (toko) 経営者そして専ら市場を商いの場とする小商人 (penjual) ——但し、野菜・果物などを扱う女たちは含まれていない——を含むものである。そして職人は、金細工、溶接工、修理工、大工などから、運転手は、村落、市場と市場を結ぶ小型トラック、州郡と各県の主要部を結ぶミニバスなどの運転手などからなる。

村内も集中的な職業の分布は見られない。強いて述べると、事業家や商人は州道沿い、特に、通称「ラジョア」(Lajoa) の名で呼ばれる村の中心部、チャチャレパンの R.K.—A 及びアッパサレンの R.K.—A 及びアッパサレンの R.K.—C に多いといえる。次にこの「ラジョア」の名の由来について述べたい。

〔ラジョア〕 筆者が集中的調査を行ったジェンナエ村は、通常、ラジョアの名で知られる。ラジョアとは元来、村の中央を流れる川とそこにある水浴び場の周辺を指す地名であったが、それが県内でも知られるようになったのはオランダ統治期、村の有志により「ラジョア・グループ」が結成されて以来のことである。彼らは県内で最初に改革派イスラム (通称モハマッディア) を導入、そ

の普及に努めると共に基金を集め1937年にはムスジッド・ラジョア（イスラム寺院）を建設した。またその翌々年には市場も設置され、それにも「ラジョア」の名が用いられた。更に、インドネシアの独立期、県内では GAPIS と称する団体が結成され、それがオランダ NICA 政府に対する抵抗運動の中心になったが、その本部はラジョアに置かれた。こうした事情によりラジョアの名は県内外にも浸透していったのである。

ラジョアについて村の内外において認められていることは、教育水準の高さと比較的資本力のある中堅商人層の多いこと、そして旧貴族層の影響力が弱いことである。オランダ統治以前のブギス社会においては、血の純度に従って細分化される貴族層と自由平民層、そして奴隷層が存在した⁶⁾。しかしこの地域の場合、一時期ガルンの王（後述）の屋敷があったものの、オランダ植民地政府により、北方4kmのチャガディ（ガルン村）に郡庁が設置されて後は、王の一族も移転することになり、貴族の直接的影響力は数の上から限られたものになったのである⁷⁾。そして、このことは改革派イスラムの本部が当初この村に設置された（1934）ことと無関係ではない。この導入に力があり、またそれを積極的に支持したのは、代々部落長もしくはイマム（集団礼拝の指導者）の系統に属する者たちであり、彼らは比較的裕福な平民層に属していた。ムスジッド・ラジョアの建設については次のような話がある。

改革派イスラムに対しては、当時多くの貴族がそうであったようにリリアジャの郡長（ガルンの王）も批判的であった。しかし、彼らはその意向に逆らってムスジッドの建設を深夜に決行し、その公認を「ラジョア・グループ」の名でオランダ植民地政府に請願していた⁸⁾。

比較的資本力のある商人が出たのもこの層からである。彼らの活動は1920年代から始まるが、原糸を直接スラバヤから購入し村内の女たちにサロン・サマリンド⁹⁾を織らせた布商人、マカッサルの中国商人から皿などの陶器類を購入した雑貨商人などが代表的である。しかし、1930年代に入ると世界的大不況

の影響で前者よりもむしろ、穀物商人などが台頭してくる。穀物商人は多くの仲買人を配下に置き、市場に持ち込まれる農産物（米、トウモロコシ、豆類）を集めマカッサルに出荷したのである。ラジョア市場の設立もこうした穀物商人の要請が大きかった。その当時、既にジェンナエ村の南北にはチャベンゲ（北約15km、ソッペン最大の市場）、タカララ（南約7km）という二つの市場があったが、両者とも、チッタ、ジャンプ、パットジョなど山間部からの産出物、特に椰子砂糖¹⁰⁾を集めるには距離が遠過ぎ、新しい市場が求められたのである。

しかし、設置当初のラジョア市場は順調ではなかった。市場は最初、現在村役場のあるところに設けられたが、あまり商人が集まらなかった。農民を新しい市場に引きつけるために、農民の入市税を3か月間、仲買人が負担したともいわれる。そして、1942年、日本軍政期になると穀物類はすべて一旦徴収されることになり、とりわけ穀物商人は大打撃を被ったのである。

インドネシア独立後における最大の出来事は、カハール・ムザカルの反乱期、所謂 DI/TII の独立時代である。なかでも、この村からはDI軍の大物がでており、ゲリラ側についた者も多かった。その当時、チャンバを越えマカッサルに至る州道はゲリラによって押さえられたため、マカッサルへはパレパレを経由しなければならなかった。マカッサルからの物資の運送は命がけであり、マカッサルと地方では商品の価格も少なくとも3倍の開きがあったという。郡と郡の間のみならず、村と村の間の移動についても書類を必要とし、主要部に設営された国軍の駐屯所では、厳しいチェックがなされた。そのため、近隣の市場間の往来もままならず、極端な物資不足に見舞われた。

1960年になるとようやく、DI側の分裂もあり、その年にはゲリラに加わった者たちの帰村が始まる。モハマッディアの中学校も、同年に開校している。村に平静さが戻り、徐々に村制が整備されて行くのはこの時期以降のことである¹¹⁾。

〔3部落とその伝承〕 この村において、長い間社会・政治的意味をもった社会単位はチャチャレッパン、アウォ、アッパサンの3部落（*kampung*）であっ

た。これらの部落は元来、ガルンの王の統治下にあった。三つの部落の由来は「市の開かれる場所」を意味するアッパサレン (*pasa* = 「市場」) を除き、ブギス地方に多く見出される植物名に関わるものである。アウォは「竹」を、またチャチャレパンは川に流れ着いた (*leppang* = 「立ち寄る」) タマリンドの実を意味する。実際、アウォ部落にはかつて竹が密生していたというが、ソッペン南部に生まれたとされるブギス稀代の英雄アル・パラッカ (1611~1696) がこの地に至った際、地面に杖を突きさすとそれが竹となり、密生したとの伝説もある。しかし、部落の開祖に関しては、明確な伝承は残されていない。一方、アッパサレンについては、部落を開いたのは第5代のガルンの王 (arung Galung), ラ・オンロン¹²⁾ともいわれる。しかし、それはむしろ、彼がこの地に初めて屋敷を建てたと解すべきである¹³⁾。ガルンの王とは、現在のジェンナエ村及びガルン村に相当する地域をかつて統治したソッペン王国の一土侯であり (ソッペン王国の政治組織内ではパグル・ロンボ・ガルンの称号をもち、軍事面を担当した)、アッパサレンは、オランダ統治以前まではガルンと一体となってアッパサレン・ガルンと呼ばれ、王の屋敷も王家の墓地 (*jarae*) や市場と共にこの地にあった。ブギス時代にはその地で五日毎に市が開かれたといわれるが、オランダ統治期に入ると、郡庁がガルン村のチャガディに設置され、それに伴って王の屋敷と市場も移動したのである。

王のいたアッパサレンに対し、他の2部落はどのような関係にあったのだろうか。その当時、二つの部落の頭はそれぞれカピタン (*kapitan*) とパビチャラ (*pa' bicara*) という異なる名称で呼ばれた。ブギス語で、*kapitan* とは「軍隊長」を意味するのに対し、*pa' bicara* とは「法官」を意味する。事実、ブギス時代までアウォ部落にはガルンの王の兵士が多く居住し、現村長はそのカピタンの子孫である。他方、チャチャレパンのパビチャラはガルン王を象徴する戦旗 (*padoma*) を保管した。戦いのある時には、先ずその戦旗が掲げられ、それが風にたなびけば、勝利、そうでなければ敗北を意味するとされ、後者の場合には戦さに赴かなかつたといわれる。この戦旗は現在でも、一般に王の祭器 (*arajang*) と呼ばれ、かつてのパビチャラの子孫であるサンロ (*sanro*

＝「呪医」)によって管理されている¹⁴⁾。

これら3部落は、オランダ統治期になってからも、部落どうしの社会的自立性を保ちながら1957年の村制施行まで存続してきた。その間、先述したラジョア・グループなど部落間を結ぶ集団の形成も見られたが、今日でも認められる部落内での内婚率の高さは、それぞれの自立性を示している。

3. ラジョア市場とその商人

〔市場の周期〕 ラジョア市場は比較的新しい市場である。伝承によれば、オランダ統治以前、既にこの村に「アッパサレン・ガルン」と呼ばれる市場が存在したこと、また更にそれ以前、「ジェンナエ」市場もあったといわれる。それらの市場については、具体的な資料もなく、我々はそれ以上のことを知り得ないが、ただ指摘しうることは、それがガルンの王の管理下にあったこと、また、今日見られるような週単位ではなく、5日を周期としていたことである¹⁵⁾。

南スラウェシの市場は、ウジュン・パンダン、パレパレなど主要都市部の常設市を除き、大半が定期市である。常設市との大きな相違は、市の開く時間が午前中、遅くとも午後1時ぐらいであること、そして開催日が一定の日数を置いていることである。その周期は地方によって若干の相違がある。例えば、同じ南スラウェシのサダン・トラジャでは一般に市場の周期は6日を基礎とする¹⁶⁾。他方、ブギスの場合、*si-pasa* (市の一周期) といえは「5日間」を意味するように、5日周期が基本である。ポネ県やパンケップ県の一部の地域のように、まだこの5日制が守られている地方もあるが、ソッペン県やワジョ県の場合、オランダの統治期において殆どの市場は週単位になっている¹⁷⁾。現在では、かつて5日市の制度があったことも忘れられているが、過去においてこの5日周期の市日は吉凶を占うなど民間信仰の上でも意義をもっていた¹⁸⁾。この5日市制の歴史的起原を語る伝承は残されていない。しかし、イスラム化(1605)以前の作といわれる『三毛猫の物語』(*Pau-paunna Meompalo*)の中に既にラムル市場の名が言及されていること¹⁹⁾、また、パラッカの王子が第3代ポネ王ラ・サリウ(La Sariu 1398-1470)になった時、その父ラ・パティ

ッケン (La Patikkeng arung Palakka) が王子にボネで最も古いといわれるパラッカ市の市日をボネ市に譲ったという伝承などから、14, 5世紀にはその存在が認めうると考えられる。また、現在でも五日市が見出されるボネ県北部では、市日の順番を表すのに、ジャワ暦を用いるのが一般的である。しかし、このジャワ暦の使用は比較的最近のことであって、人々は市の名をその順番の通りに覚えることに不自由を感じなかったようである。

ソッペン県において、市の周期が週単位になったのは、オランダの統治時代の1927年前後という。曜日を定めて、週一度ないし二度開かれる場合が殆どで、その曜日は当時から現在まで変わっていない。

市場の曜日は同一地域内では重複しないのが通例で、小商人たちは日を追って市から市を移動することになる。ミニ・トラックが普及する以前は、自転車の荷台に高く荷物を積み、市で寝泊りながら市から市を回る行商人がいたということだが、今日では殆ど見かけない。通常は、小商人が共同して車をチャーターし、自分の村と市場を日帰りで行き来する。例えば、ジェンナエ村の多くの小商人の採るサイクルは通常次のようである。

市場の名称と所在する郡(県)名

月曜日	ラジョア (リリリアジャ) / チャンベンゲ (リリリラウ)
火曜日	タカララ (マリオリワウオ)
水曜日	ロッコエ (ララバタ) / チャガディ (ガルン) / ムティアラ (ボネ県)
木曜日	パチョンカン (リリリアジャ)
金曜日	チャベンゲ (リリリラウ)
土曜日	タカララ (マリオリワウオ)
日曜日	ラムル (ボネ県) / ソッペン (ララバタ)

殆どの小商人は休むことなく毎日市場へ向かい、遅くとも午前6時から7時には到着する。そして7時半には店を開く。最も市場が混雑するのは8時から9時の間である。市場の周辺には買物客を乗せてきた小型トラックや馬車が並

び、賑わう。市場の終わる時刻は一定しない。チャンゲやタカララのように大きな市場であれば午後1時、2時頃まで賑わうが、小規模の村市場だと午前9時には商人が引き上げてしまうことが多い。また、同じ市場でも曜日によって異なる。例えば、ラジョア市場が開かれるのは、月曜日と金曜日だが、大半の商人は月曜日しかラジョア市場で商売しない。金曜日にはソッペンでも最大規模のチャベンゲ市場が開かれ、この地域の客はみんなそこへ引きつけられてしまうからである。それで金曜の市は、月曜の「大市」(*pasa lombo*) に対して、「小市」(*pasa caddi*) と呼ばれる。月曜ならば、午前8時から午後1時ごろまで賑わう市も、金曜日には、あまり人気のない市場の片隅で村内の野菜・果物売りや干魚売りがいるだけで、しかも買い手の数が少ない。この日にはどの小商人も、午前10時には店をたたんで引き揚げてしまうのである。

同じ曜日いくつかの市日が重なる場合、商人は必ずしも最も近い市で商売するのではなく、市場までの荷の運搬料やその市場での顧客(ランガナン *langanan*) の数を考慮し選択する。例えば、水曜日には隣村のチャガディとパットジョでも市が開かれるが、ラジョアから行く者はない。いずれも村市場で集まるのは野菜売りだけ、午前9時には誰もいなくなってしまうからである。市場の賑わい、顧客の数そして運搬料、こうした諸要素により、市のサイクルが選択されるのである。

〔市場の種類と構成〕 現在、市場を統轄するのは各県(市)の地方税務局(Dinas Pendapatan Daerah = 通称 DIPEDA) である。行政上、税務局は各市場を村市場・郡市場に区別している。村市場とは店舗・商人数の規模が小さい市場をいい、郡市場の場合は、その施設建設にあたり政府援助をえており、かつ村市場に対し、中央市場的性格をもつものである²⁰⁾。郡市場の場合、商人はそこで商売するために、物品税(*cukai*) の他に場所に応じた賃貸料を支払わなければならない。市場の構成物として、キオス(*kios*) やガルドゥ(*garudu*)、そして一種のプラット・フォームでその上に店舗の並ぶロッズ(*lods*) などがあるが、これらが政府援助で建設された場合、その市は‘pasar impres’ と呼ばれ、そうした施設の使用料は税務局に納入され、地方

表3 ラジョア市場 1982/83 における市場使用料及び物品税

月	月毎の使用料	日毎の物品税	計
4	45,000	114,900	159,900
5	30,000	160,850	190,850
6	37,500	121,450	158,950
7	25,000	169,950	194,950
8	30,000	127,650	157,650
9	30,000	75,225	105,225
10	35,000	198,700	143,700
11	37,500	78,950	116,500
12	52,500	202,625	255,125
1	25,000	141,500	166,500
2	40,000	172,800	212,800
3	40,000	147,400	187,400
合計	427,500	1,622,000	2,049,500

財政の大きな歳入となるのである。ラジョア市場の1982/83における月別使用料・物品税は次のようである。(表3参照)

こうした行政的区分の他に、ソッペン県にはないが県によっては、扱われる商品の種別によって魚市場、獣市場のような特殊市場をもつところがある。次に市の構成をより具体的に把握するため、ラジョア市場をとりあげよう。市場の中央にA～Dまでの区画 (lods ローズ—高さ1 m余り長さ25mの石台) が縦に並び、それを挟むようにE, Fのローズがある。これらのローズは大型の屋根で覆われており、それぞれの区画が布・衣類、雑貨、割れ物 (pecah-belah ガラスの食器類の他、プラスチックの洗面用具などを含む) などに分かれている。ローズと市場の外周とに挟まれた空間を占めるのは、野菜・果物、香辛料、米、椰子砂糖などであり、また北側部分は専ら、鮮魚・干魚類である。市場の外周は、東西の部分はキオス (多くは雑貨)、南北の部分はガルドゥ (コーヒー、ソップなどの軽食堂が多い) からなる。キオスは地方によりフロン・トコ (front toko) と呼ばれたりするが、ガルドゥとの違いは前者が市場の建築物の一部として建てられた備え付けの「店舗」である

のに対し、後者は、商人が市場の敷地内の土地を買って建てた、言わば自前の店であることである。この他に、直接地面に設置される竹製の台 (*balai-balai, panrung*), そして屋根付きの仮小屋 (*bola-bola*) がある²¹⁾。また、ロツズの上に設置される木製の台 (*kelanpang*) は、錠がかかる棚として商人が荷の一部を保管できる構造になっている。ラジョア市場の場合、これらのうちで、財務局に月決めの場所代を支払うのは、キオス (2,500—5000Rp. 一調査当時, 100 = 450 Rp.), ロツズ (300—600 Rp.), ガルドゥ (300 Rp.) である。他方、鮮魚・干魚売りや野菜売りが多くを占める、仮小屋や敷地の一角にゴザを敷くだけの商いには、50—100 (Rp.) の物品税だけが徴収される²²⁾。

〔市場で生活する人々〕 市場は単に商人と買い手との間で売買がなされる場所ではない。例えば、農民と仲買人、卸し商人と市場商人との取引が明け方近くから、あるいは市の立つ前日から始まるのである。市場には買い手のほかにどのような人々に関わるのか、先ず、所謂「商人」のカテゴリーを見ると、それは次のようである。

先に我々は、村役場の職業区分において、事業家と商人が区分され、後者には穀類を集出荷する穀物商人から商店経営者、そして市場商人 (小商人) が含まれるのを見た。しかし、公的文書において用いられるそうした分類と、所謂「民間」のそれとでは、若干分類基準が異なる。それは特に、'pedagang' の用語法に関してである。次に関連語彙を示す。

(1) *padangkang* = pedagang 比較的資本力のある商人をいい、仲買人を使って米、豆などを集める穀物商人を主に指す。また、自分の商店 (*toko*) をもつ商人などもこれに含まれる。(2) *pa' baluk* = penjual 市場内で商いする小商人の総称であり、市場における野菜・魚売りから布・衣類・雑貨商などを含む。(3) *pa' gadde* = penjual makanan 軽食堂 (ワルン) で飲食物を売る者をいう。(4) *pa' palele* 仲買人。(5) *pa' laleang* = penjajah 例えば、家々を回って布を売る行商人。(6) *tukang* = tukang 職人。(7) *pangesang-ngesang* = kuli 荷運び人夫。

padangkang が *pa' baluk* と異なるのは、資本力から生ずる違いの他に、村

落社会の外部との取引を行っているかどうかの違いがある。これに対し、*pa'baluk* の場合、「市場」を表す謎かけに「お互いに少しずつ、な—んだ？」という表現があるように、村落社会内部での交換、「買い手」に対しての「売り手」にニュアンスの比重があるのである。*pa'gadde* が今日一般に意味するのは、市場及びその周辺の軽食堂 (*warung*) 経営者であるが、元来、人前で食事をことを好まないブギス人にとって、'warung' が市場に登場したのは比較的最近の出来事だという。*pa'gadde* は、本来、市場というよりはむしろ、村と村とを結ぶ街道筋にあって人々が休む「茶店」ほどの意味であったようである。*pa'palele* とは、穀物を出荷する穀物商人や鮮魚を集荷する魚商人などの *punggawa* (親分) と結びついて使用される語である。かつてラジョア市場を設置するのに貢献した穀物商人がそう呼ばれ、何人もの *pa'palele* を配下に置いた。また、今日でもテンペ湖の魚を扱う魚商人には、この語が用いられている。ついであるが付け加えると、テンペ湖の漁師が、*pa'palele* や *paleleang* などを通さずに自分で直接市場で魚を売った場合、漁師頭の名において制裁が課せられるが、ジェンナエ村周辺の農民についてはそうした慣習はない (Sunato Hs 1975 参照)。

さて、以上の人々のうち、最も市場と関わりが深いのは、*pa'baluk*, *pa'-gadde*, *tukang* である。これらは更に諸種の業種に細分される。次に示すのは、

表4 1982/83年度ラジョア市場における業種別商人数

1. 布	35	13. 学習書	2
2. 既製服	78	14. 金	4
3. サロン	5	15. 紙巻タバコ	8
4. 帽子	8	16. ニワトリ	4
5. 雑貨	85	17. 肉	3
6. 果物	40	18. 鮮魚	8
7. 林産物	12	19. 干魚	16
8. 野菜	30	20. 軽食堂	20
9. 調味料	13	21. 裁縫	3
10. 割れ物	3	22. 理髪	3
11. プラスティック	5	23. その他	5
12. 編物細工	8	合計	398

1982/83年度ラジョア市場における業種別商人とその平均的数字である。

しかし、これらの数字は先に掲げた1982・83年の月別の賃貸料・物品税を見ても分かるように、季節や市場の状況に応じかなり変動している。ここ数年、ラジョア市場における商人の数は減少傾向にあるといわれるが、市場を直接管理する市場長（クバラ・パサール kepala pasar）によると、1984年10月4日現在で登録されさキオス・ロッズ・ガルドゥの使用者の合計は209人である。この数字には、仮小屋や竹製の腰掛台、ゴザを使って商いする魚売りや野菜・果物売りなどは含まれない。それについて、各商人の出身地を業種別に見ることにしよう。（表5参照）

表5 ラジョア市場における出身地別ロッズ・キオス・ガルドゥ使用者数
(1984年10月現在)

出身地	業種	布	衣類	雑貨	香辛料	割れ物	サンダル	金物	金	ポップコーン	軽食	職人	その他	合計	割合* (%)
Jennae		10	15	24	12	9	6	9	1	3	17	4	11	121	57.89
Cangadi		4	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	8	3.82
Pattojo		3	7	0	0	1	0	1	1	0	1	0	1	15	7.17
Paconkang		0	3	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	7	3.34
Takalala		4	5	2	0	0	0	0	0	0	4	1	1	17	8.13
Cabenge		2	7	3	0	0	0	0	0	0	0	0	6	18	8.61
Soppeng		13	3	2	0	0	1	0	0	0	2	0	1	22	10.52
Sengkang		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.47
合計		37	42	33	12	10	1	13	3	3	24	0	21	209	99.95

(*小数点第3位以下切り捨て)

これらの資料をもとに、ジェンナエ村の商人についてどのようなことが指摘できるのだろうか。この表を登録された商人のうち、過半数以上をジェンナエ村の商人が占めている。これに、その大半がジェンナエ村出身である野菜・果物売りの数を加えるならば、その比率は7割近くになるであろう。また、業種に着目すると雑貨、われ物、香辛料にジェンナエ村の商人の割合が高い。これに対して、布・衣類に他村の割合が高く、とりわけ、布ではソッペンが、衣類ではパットジョ、チャベンゲが目立っている。このことは、ジェンナエ村の市場商

人が雑貨などの生活用品を扱う傾向のあることを示しており、かつ、布・衣類のような「高級」商品には比較的遠隔地の商人の進出傾向のあることを示しているであろう。次に、こうした商人の特徴を更に業種別に見ることにしよう。

〔ジェンナエ村の商人〕 筆者はラジョア市場の64人（うち女20人、他村者11人）の商人について、簡単な聞き取り調査を試みた。以下にその集計の一部を紹介したい。サンプルとしたのは、18業種にわたる商人でその内訳は次の通りである（表6）。

表6 アンケート対象者数

1. 雑貨	14	12. 紙巻タバコ	1
2. 衣類	10	13. コーヒー・砂糖	2
3. 布	4	14. ヤシ油	1
4. 割れ物	5	15. おしろい	1
5. 香辛料	4	16. プラスティック縄	1
6. 野菜・果物	4	17. 金物	1
7. 鮮魚・干魚	4	18. 裁縫	1
8. サングル・靴	3	19. 理髪	1
9. 金	2	20. 軽食	2
10. 豆類	1	21. ポップコーン	1
11. 椰子砂糖	1	合計	64(人)

まず、最初に全体的な特徴を述べておこう。ラジョア市場の民族的構成は、ワタン・ソッペンに居住する3人の中国人商人を除くと、すべてブギス人である。また、商人の出身社会層は、元貴族層の2名（アンディの称号を名乗るがいずれも高い地位には属さない）を除いたすべてが平民層の出身である。男女の性的分業についてみると、区別がはっきりしているのは、鮮魚・干魚売り（男）と野菜・果物、米・豆類（女）であり、また、割れ物、金売り（男）、衣類（女）もこれに次いで区別が明確である。男女の比率が近く、夫婦で商売する場合も多いのは、香辛料、雑貨などである。両親が商業に従事していた者は、64名中わずか6名であり、しかも同業種は干魚・鮮魚の3名であった。マーケット・サイクルについては先に述べたが、最も共通するのは、ラジョア（月曜）、タカララ（火曜・土曜）、パチョンカン（木曜）、チャベンゲ（金曜）

であり、日曜・水曜についてはかなりの相違がみられた。タカララ、チャベンゲは郡市場であり、それぞれ4 km, 7 kmの距離に、またパンチョカンも県道に沿って東に6.5 kmの距離にある。いずれも乗合トラックに乗れば、200 Rp. で往復可能であり、ジェンナエ村の消費者にとっても買物圏内に入っている。さて次に、主な業種につき、商人の事例を見ることにしよう。

〔雑貨商〕 元来、「雑貨」という場合、*pecco* と呼ばれる顔料及び石鹼を指したが、現在では商人によって多少異なるものの、菓子など食料品を含んだ日用雑貨品がこれに含まれる。例えば、市場のガルドゥに住むある商人の場合、次のようである。化粧品類、石鹼・洗濯石鹼・洗濯バサミ、市販用の薬、蚊とり線香、歯ブラシ・歯磨き、ノート・ボールペン、トランプ、ドミノカード、電池・懐中電灯、シロップ・コーヒー・ココア・紅茶・ビスケット、インスタントラーメン、小麦粉・マーガリン、味の素・ケチャップ・ゼリーの素、そしてタバコなどである。こうした雑貨を商う者は、ジェンナ村の市場商人中約30人と最も多く、この他にも自分の家の一部、またはその敷地にガルドゥを設けている者もいる。この商売に従事する者は最も長い者で21年、逆に短い者は1年未満の者が3名いる。この業種で最も規模が大きいといわれるY氏(43歳)の場合、中学卒業後、豆を栽培したが、1963年より現在の商売を始め、現役の雑貨商としては一番古い。Y氏は、ラジョア(月曜)、タカララ(火曜、土曜)、パチョンカン(木曜)、チャベンゲ(金曜)の他に水曜はラムル、日曜はムティアラで商売をする。ラムルはジェンナエ村から35 km、ムティアラは28 kmの距離でいずれもボネ県に属するが、むしろこちらの方に顧客がいるという。また、氏を含めて3名が仕入先をウジュン・パンダンの中国人の商人としているが、最近、女たちの雑貨商いが増加しているのは、チャベンゲの商人が安い利子で大量に品物を貸付けているからである。Y氏の場合はひと月の期限付きで品物を借入(*pinjam*)²³⁾しているが、チャンベンゲ商人の場合、利益を1パーセント程度に落とし、一週間を期限としている。

(布・サロン)

この業種は、以前多い時ではジェンナエ村で10人の商人がいたが、現在では

常に市場で商いしているのは、わずか3人に過ぎない。B氏(42歳)は元来は農業であったが、雑貨商を5年営んだ後、布・サロンを扱うようになって15年になる。布の場合、5,000Rp. 仕込んだら、7,500~10,000Rp. で売れるので利益は大きい、売れ行きは捗らないので結局儲けは少ないという。布の仕入れは、ウジュン・パンダン(中国人)から月1回、センカン(ブギス人)から毎週1回行すが、ウジュン・パンダンの仕入れには本人の代わりに穀物商人に頼むことも多いという。ラジョア、タカララ、パチョンカン、ラムル、ムティアラの各市場を回るが、チャベンゲには行かない。

(衣服)

衣類の場合、商人の数の増減は少ない。衣類が売れる時期は、プアサ(断食)の明けの1、2週間前である。これを扱うのは、専ら女である。S氏(女46歳、独身)は当初、兄弟と共にカリマントンに出稼ぎし、そこで割れ物商を5年営んだ後、ジュンナ村に戻り母親と共にこの商いを始めた。一人でやるようになってから4年になる。ラジョア(月)、タカララ(火・土)、ラムル(水)、チャベンゲ(金)の市場を回り、水曜と日曜は休む。仕入れはウジュン・パンダンのパサール・セントラル(州最大の常設市場)へ行き、自分で品物を選び、4軒の店(いずれも中国人経営)から1か月の期限で借入れる。利益が上がればそれで金(きん)を買う。1978年、S氏はメッカに巡礼しハジになった。また、この業種にはワタン・ソッペンに住む3人の中国人(客家)が含まれる²⁴⁾。彼らは自身の商店(うち1人は食堂)をもつが、ラジョアのほかタカララ、パンカン、チャベンゲを回る。扱う品物は、衣類のほか腕時計、靴、化粧品、高級カバンといったように幅広い。N氏の場合、オランダ統治時代初期、祖父の代に中国(広東)からポンパヌア(当時ボネ島の県庁所在地)に来たという。

(割れ物)

主な商品は、バケツ、ボール、水入れ、手桶などの洗面用具、鍋・皿・コップなどの食器類、それに盆、保温ポット、ランタンなどである。現在、この商いを行っているのは11人だが、5年前まではわずか4人だった。M氏(35歳)

は、元村役場の職員だったが、割れ物を扱っていた義父がカリマントンへ出稼ぎする時、これを引き継いだ。割れ物は、イスラム暦、ムハラーム月の5、6日に買うと縁起が良いとされ、その日には最低普段の5倍の売れ行きがあるという。この業種で最も長いH氏(48歳)は、元来、農業であったが、雑貨、サンダルの期間を入れると25年間商業を営んでいる。M氏もH氏も水曜・日曜を休み、ラジョア、タカララ、パチョンカンを回る点で共通するが、金曜はチャベンゲ(M氏)、タンジョンゲ(H氏)と異なる。H氏はタンジョンゲ(ジェンナエ村からタカララを経てバルー県へ向かう途中にある。約20kmの距離)へ行く唯一の商人だが、氏によれば市場の規模ははるかに小さいが、品物は捌けるという。

(香辛料)

雑貨商の場合3,000,000Rp.(約67万円) あっても品物の数は大したことないが、香辛料ならば1,000,000Rp. あれば十分だといわれる。この商売が一番長いのは、元農業で身体をこわしたため、商業に転じて10年になるK氏(52歳)である。これまでの商いの場合、商品の仕入れ先はウジュン・パンダンカセンカンであったが、香辛料の場合、やや多様である。例えば、ショウガ、クミリはタカララ市場で直接買い、菓子材料はチャベンゲにいるワジョ商人から、玉ネギ、赤玉ネギはウジュン・パンダン(中国人)から仕入れるという。また、この商売を始めて6年のS氏(31歳)は、コショウ、ニンニク、チェンケ(丁字)など12種の香辛料を扱っている。父親は農業だが、二人の兄がこの商売を始めたのがきっかけで同じ道に入った。仕入れ先はセンカンとウジュンパンダンの二つあり、前者からは借入で、後者からは現金で仕入れている。後者からの仕入れはまだ1年のため、現金払いになるという。他方、カリマントンへの出稼ぎ経験者であるL氏(35歳)は、菓子材料を商い4年で10人の同業者の中で「一番大きな棚」を持つようになった²⁵⁾。マーケット・サイクルは、月・火・木・土曜については三者とも同じだがN氏は水・日曜をチャガディ、S氏とL氏は水曜をラムルとし、日曜はソッペンに行くか休む。

(金売り)

ジェンナエ村の金屋は4名の内2名は、姉妹をそれぞれ妻とし姻戚関係で繋がっている。両者ともにまだ年齢は30代だが、すでにメッカ巡礼を果たし村内における富裕層に属する。その内B氏(35歳)は、オランダ NICA 政府時代、ガルンやロムプッレのレワタン(分郡長)になり、40人の妻をもったといわれる貴族の孫にあたる。父親はガンラに住む富裕な穀物商人で、一時B氏もそれを伝った。以前、タバコ商人をしたが、1年前から現在の商売を始めている。

(鮮魚・干魚売り)

鮮魚はソッペン県北部とワジョ県にまたがるテンペ湖に産出する淡水魚を主とし、商人も直接センカンから来る者やセンカンからソッペン(県庁所在地の正式名はワタン・ソッペンだが、通常こう呼ぶ)に向かう分岐点に位置するチャベンゲからの商人が多い。これに対し、干魚を売るのはジェンナエ村やソッペンの商人である。ジェンナエ村で干魚売りを常む3人は、いずれもパットジョ出身で、その内の二人は二世代にわたって干魚売りに従事している。彼らは朝早く、ラジョア市場でセンカンからきた商人から品物を買う。野菜・果物と同じく、魚などの生鮮品(干魚も含む)は借入(pinjam)が出来ない。市場の商人としては最年長に属するA氏(およそ75歳)は祖父の代からの干魚売りで、すでに60年この商売を行っている。A氏は、自分の馬車で月・金曜(ラジョア)、火・土曜(ガンラ)、水・日曜(チャガディ)、木曜(パチョンカン)と回る。また、T氏(54歳)の場合、オートバイを運転して月・金曜(ラジョア)、火・土曜(タカララ)、水・日曜(チャガディ)、木曜(パチョンカン)と回る。

(野菜・果物・林産物)

これに従事するのは、1人を除きすべて女である。彼女らは通常、野菜売り・果物売りと呼ばれるものの、収入は乏しく「商人」とは認められていない²⁶⁾。S氏(女70歳)は30年間、バナナを売っているが、儲けは少ないといい、殆どの女たちがその日得た日銭で帰りに小魚を買うのを楽しみに商売しているともいう。彼女らが扱う野菜・果物の種類は、普通一人で2、3種、多くても5、

6種に過ぎず、産物の購入も殆どがラジュア市場である。自分の馬車を使って、25年間市場で商売しているB氏(男44歳)は月曜ラジュア、火・土曜タカララ、水・日曜チャガディ、木曜パチョンカン、金曜チャベンゲと回っている。

林産物の代表は椰子砂糖である。ラジュア市場は以前、ジョレやチッタから産出する良質の椰子砂糖の集まるところとして知られたが、1967年、ララバタ郡にロロエ市場が出来てからは、品物がそこへ引き寄せられてしまい、かつての名も衰えてしまった。それでも、月曜にはジョレから椰子砂糖を持ってくる者が少数あり、女たちはそれを買ひ、再び金曜の市場で売るのである。

以上、業種別に各商人について見てきたが、その全体についてどのような事実を指摘しうるであろうか。業種別に、仕入れ方法、マーケット・サイクル、転業経験などを見ると、先ず、野菜・果物、魚などの生活必需品と雑貨、割れ物、衣類、布などの日用品との間に相違が見られる。前者の場合、元手は少ない。品物の購入場所も多くの場合、ラジュア市場であり、いわば、その日のおかずを得るための「小遣い銭稼ぎの」商売である。これに対し、後者の仕入れ先は、ウジュン・パンダン、センカンあるいはチャベンゲであり、その方法も多くは‘pinjam’と呼ばれる週や月単位の借入れ形式である。また、転業経験の度合いから見ても、鮮魚・干魚売りや野菜・果物売りにおいて少なく、雑貨、割れ物、香辛料などに多いといえる。

〔結語〕

以上我々は商人について、その主な業種別に見てきたわけであるが、最後にこうした商人と市場を村全体の中で考えてみたい。

当初、我々は、ブギス人の生業選択における柔軟性と適応性が、市場という状況においてどのように現れているか、という問題を提示したが、これまでの観察はそれにどのような示唆を与えるであろうか。先ず、指摘しうるのは、同じ市場商人(penjual)の間に、大雑把に言って生活必需品と日用品とを扱う二種の商売のパターンが認められるという点である。この二つの領域は、それぞれ市場における伝統的な部分と比較的新しい部分とに対応しているといえる。

どの市場を訪れても、我々が先ず目にするのは、色とりどりの野菜や果物を並べた女たちの一角であり、また、最も活気のあるのは、魚売りの場所である。両者に共通するのは、いずれもが客を呼び込む技術、一種のパフォーマンスを備えている点である。それは、彼らのもつ「売り手としての伝統性」によって支えられたものだろう。同時に、それゆえに彼らは市場において最も変わりにくい部分であるともいえる。これに対して、日用品を商う人々は、市場という制度にとっては、殆どが「新参者」である。彼らは、魚売りとは異なり、客が立ち止まってくれるのを待ち続けるだけである。また、元来農民層の出身であり、商人としての経験年数が短く、かつ転業経験も多いという共通点をもつ。前者が変わりにくいのに対し、後者は今後も転業の可能性をもつともいえるであろう。それでは、後者はどのような可能性をもっているのであろうか。

ここで興味深いのは、ジェンナエ村における初期の商人とその次世代に見られる職業の変化である。ジェンナエ村において初期の商人としては、ラジョア市場の設立に貢献した穀物商人のほか、割れ物、おしろい (*pecco*)、布などを扱った9人の名がしばしば挙げられる。彼らの多くは1950年代から60年代にかけて没しているが、その次世代において目立つ特徴は、親と同じ業種を継いだ者がいないことである。例えば、最初の雑貨商といわれた者の息子は建材商店経営、割れ物商人の2人の息子は公務員と教員に、金物商人の息子は事業家としてミニバスを経営するなど、職業部門そのものを変えてしまった者が殆どなのである。そこには、市場商人 (*penjual*) から商人 (*pedagan*)、更には事業家 (*pengusaha*) へ、という傾向が公務員 (*pegawai*) 志向と並んで認められる。また、最近でもこうした傾向は、特にミニバス経営に認められるものである²⁷⁾。

現在の市場商人が、上述の例に見られるような傾向を共有していること、換言するならば、市場商人から商人へ、そして事業家へという段階を想定し、その時々を生業を一つの段階として考えていることは確かであろう。それゆえに、今後も彼らは転業を繰り返していくことになるだろう。そして、そこには彼らの祖先が移住先の地で示したと同じような様々な生業に対する柔軟性を認めること

ができるはずである。けれども、彼らは今日、成功した祖先たちと同じ道を歩むことができるとは必ずしも保証されていない。とりわけ、最近では、大手の中国人商人によって直接ウジュン・パンダンから大量の商品が持ち込まれている。また、新しいショッピング・センターの開設（ワタン・ソッペン）は従来からの市場の機能を変えようとしている。こうした急激な変化、悪化する市場の状況は、商人たちから転業のみならず商売そのものの機会さえ奪いかねない勢いである。これまでになかった厳しい経済環境の中で、彼らがどのような適応をうるのか我々は見守っていかねばならないのである。

註

- 1) ブギス語では、*pa' sompe* (航海者) が今日の所謂「出稼ぎ者」を意味する。尚、以下の記述では、インドネシア語とブギス語が、しばしば両用されるが、後者はイタリックにして区別した。
- 2) ここで一つ付言するならば、泉などの水源は単に日常生活において欠かせない場であるばかりか、クラマツト (聖域) として信仰面においても重要な役割を果たしている点である。これは、ブギスの地下 (水) 界観念と結び付き、人鱈信仰とも大きな関わりをもつが、詳しくは別稿に譲りたい。
- 3) *lingkungan* は更に、R.K. に下位区分される。アッパサレン区の場合、A~D、チャチャレバン区の場合、A~Eに分かれる。
- 4) 男女の人口比が女性に偏っているのは、青年期の男性の中で出稼ぎ・転出のため村を離れる者が多いと考えられる。
- 5) *Memoir van overgave onderafeeling Soppeng 1931*.
- 6) 詳細は C. Pelras 1970 を参照。
- 7) 現在、村内にいる「アンディ」(貴族の称号。通称としても用いられる) の中で、村民によって真の貴族と認められる人物は二人しかいないといわれている。しかし、いずれも外来の転入者であってこの村元来の成員と直接的繋がりはない。
- 8) その文書は現在、国立文書館ウジュン・パングン支部 (*Arsip Nasional di Ujung Pandang*) に保存されているが、マレイ語で記されている。これも当時の教育水準からすれば、例外的といえる。
- 9) サロン (腰布) の一種。図案に特徴がある。
- 10) *gula merah* 椰子から作る砂糖の一種で、調味料や菓子の材料としてブギスの食生活に欠かせない。なかでも、チッタの椰子砂糖は良質のものとして県内で有名。
- 11) もちろんこれにより、すべてが解決したわけではない。まもなくして勃発した共産党クーデタ未遂事件、それに続く共産党員検挙などインドネシア全体を襲った政治不安については周知の通りである。
- 12) ラ・オンロンはボネ出身の王子で父親のマッパボレオンロに続き第30代ダトゥ・ソッペン (ソッペン王) にもなった。また、ガルンの王は、パットジョ国 (Wanua Pattojo) の王に由来する初代のアンボ・チュベより、ソッペン県第2代県知事になったアンディ・マフムッドまで8代を数える。
- 13) あるロントララ伝承者は初代アルン・ガルン以前のこの地における統治者をあげており、また、かつてこの地域一帯は「アブヌアング」(*Abunange*) という、現在はアッパサレン内の一集落の名に過ぎない名称と呼ばれたという。「アブヌアング」とは「国 (*wanua*) のあるところ」を意味する。また、アブヌアングの住民は今で

も他の村民から、「伝統的」な人々として区別されているのは彼らがこの地域における先住者であることを思わせる。

- 14) ガルン王国内における役職としては、*arung* の下に *pa' bicara* (2名), *kapitan* (1名) がおり、アウオ部落の *kapitan* は軍事面を、チャチャレパンの *pa' bicara* は祭事面を担当したと考えられる。
- 15) ジェンナエ市場については、あまり多くの伝承は得られなかったが、アッパサレン・ガルン市場同様、ガルン王の時代のことだという。ラジョア川の近くにあったが、そこで争いが起り閉鎖されてしまい、その後アッパサレン・ガルン市場が出来たといわれている。
- 16) Abu Hamid 1980/81.
- 17) 但し、ララバタ郡のジョレ市場は例外的に1981年まで5日市であった。また、ワジョ県のソロ、カムピリ市場はボネ県に近いため、5日制である。オランダ植民地政府が5日市制を週単位に変えたのは、一説には、日数計算を容易にし、それにより市の税収の計算をも簡易化するためであったといわれる。
- 18) 例えば、最近まで5日市のあったジョレにおいて、あるインフォーマントが挙げたのは、マリオ(もしくはブル)、ソッペン、パットジョ、ベロ、ワトゥの市日であった。そのインフォーマントによれば、マリオ及びベロの市日は吉日であり、農作業、婚姻、旅など何事をも始めるのに良いのに対し、ソッペンの市日は凶日でその日に建てた家は必ず火事に会うとのことだった。そして、ソッペンの市日がなぜ悪いのか、という問には、かつてソッペン王がその日ラムルーボネの—王国—の王により殺されたと語った。
- 19) Muhammad Sikki (dkk.) 1977/78. p. 206 参照。
- 20) 県内には制度的に定められた中央卸売り市場はない。
- 21) 古い型に属する村市場にはキオスやロッズがなく、この仮小屋が敷地内に建ち並んでいる。
- 22) キオス、ロッズで使用料に幅があるのは、それが店舗の面積に比例するためである。
- 23) 市場長によれば、この借入方法が始まったのは1960年代に入ってからのことである。
- 24) 同じく市場長によれば、彼ら中国人の居住は県庁所在地しか許可されていないという。
- 25) インドネシア語の *lemari* の訳。商品をどれだけ多くもっているかが、商人の大小の基準の一つになっている。
- 26) 住民台帳の職業欄には単に「家事」(*urusan rumah tanggah*) と記されているだけである。
- 27) ミニ・バスとは12~15人乗りのマイクロバスのことで、現在州都のマカッサルと各

県とを結ぶ交通手段の要である。その交通を支えているのはミニバス1台、多くても4, 5台を所有する現地の個人経営者である。ジェンナエ村にはこのミニバス経営者が、小村にも拘わらず5人もいる。彼らの経歴を見るとタバコ商人、布商人、建材販売、教師、農業と様々である。

文 献

- Abu Hamid 1980/81: Pola Pemukiman Daerah Sulawesi Selatan. Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Pusat Penelitian Sejarah dan Budaya, Proyek inventarisasi dan dokumentasi kebudayaan daerah, Ujung Pandang.
- Andaya, L. 1981: The Heritage of Arung Palakka. The Hague.
- Mattulada & Maeda (eds.) 1982: Villages and the agricultural landscape in South Sulawesi. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- Muhammad Sikki (dkk.) 1977/78: Terjemahan beberapa naskah lontara Bugis. Balai Penelitian Bahasa di Ujung Pandang.
- Sakurai, Y. 1982: "An Essay on the Economic Life of Desa Pallime in South Sulawesi" in, Mattulade & N. Maeda (eds.)
- Pelras, Ch. 1971: Hiérarchie et Pouvoir Traditionnels en pays Wajo'(1)(2) Archipel 1, 2.
- Sunarto Hs. 1975: Pemasaran ikan danau Tempe. suatu studi kasus tentang pemasaran ikan di desa Watalipue, kecamatan Tempe, Kabupaten Wajo, Sulawesi Selatan. Pusat Latihan Penelitian Ilmu-ilmu sosial Ujung Pandang.
- 山下晋司 (nd.): 「ウジュン・パンダンのバザール経済。」 (未刊)